

# 本願寺史料研究所報

26号

発行所 本願寺史料研究所

〒六〇〇一八二六八 京都市下京区七条大宮上ル

龍谷大学大宮学舎図書館内

電話 〇七五―三四三―三三一―

内線(五四一八)

発行人 所長 千葉 乘隆

発行日 二〇〇〇年九月三〇日

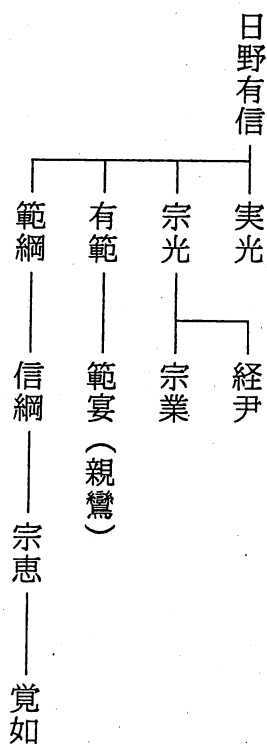
## 西本願寺所蔵 古本本願寺系図について

平松 令三

### 一 これまでの本願寺系図研究

一般に家の系図は、それが制作された時点で、そのときの伝承に基づいていることが多いが、更に後代の者がそれに改変を加えることもしばしばである。そのために歴史学でそれを史料として使うのには慎重な史料批判が要求される。しかしその一方で、そんな系図をならべてみると、制作された時代々々のその家の意識が変って行くのがよくわかって面白い、ということもある。本願寺の系図はその典型のようである。

中世の代表的な系図として著名な『尊卑分脈』には、藤原氏北家の「内膳公孫」として本願寺系図を収載しているが、そこでは親鸞につながる祖先が、次のような構成になっている。



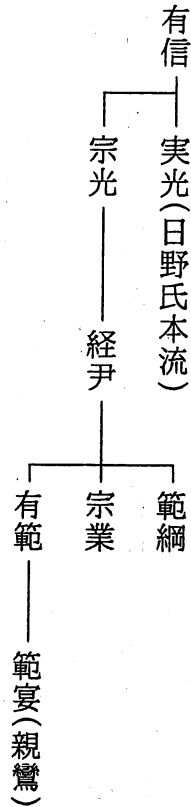
ところがこれでは不合理な点が多い。たとえばこの系図で親鸞の伯父にあたる実光は一〇六九年の生れであることが他の史料から明らかだから、一一七三年に生れた親鸞との年齢差が一〇四年もあるなどはその一つで、こうした不合理性から、中沢見明氏は

その著『史上之親鸞』（大正十一年刊、昭和五十八年法蔵館より再刊）において、

有信の子に、有範なる人物があつてその子孫なく、その事跡も明らかに知れていなかった人物が、日野系図中にあつたら、聖人滅後何人かが、或目的の爲めに、聖人及びその弟尋有等を、有範の子としたのではあるまいか。

と疑問を投げかけ、これが真宗史の学界に大きなショックを与えたのであつた。

しかしそののち、太谷大学の山田文昭氏が『真宗史稿』（昭和九年刊）において、この『尊卑分脈』本願寺系図は後世の竄入によつて誤ってしまったものであつて、親鸞は次のように庶流ながら日野家の家系に連なつていて、覚如の『親鸞伝絵』に記された家系は正しかつた、と論証した。



戦後になつて赤松俊秀氏は、『尊卑分脈』本願寺系図が誤つてゐるのは、親鸞の祖父にあたる経尹が「放埒人」であつて、世代から除かれたことによるのではないか、と推測し（吉川弘文館人物叢書『親鸞』昭和三十六年初版）、それがほぼ定説となつてい

る。

### 二 九条<sup>たねみち</sup>植通筆本願寺系図

この『尊卑分脈』本願寺系図と大きくかわつてゐる、と見られるのが、西本願寺宝庫に収蔵される天文五年（一五三六）九条植通制作の本願寺系図である。

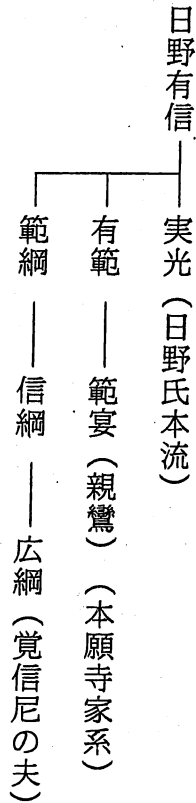
この系図は縦三四・三cm、全長四五六・九cmの本紙に、幅二三・五cmの表紙をとりつけて卷子装としたもので、冒頭に大織冠鎌足から始まつて九条兼実にいたる藤原氏の本流歴代を記し、それに續けて植通にいたる九条家の略系図を載せてゐる。次に「日野祖」として真夏（内膳長男）を挙げ、そのあとを日野氏の略系図とし、その中で、有信の子を実光・有範・範綱の三人とし、その有範の子孫を本願寺家系として詳記して、光教（証如）で終わつてゐる。そして末尾に次のように奥書してゐる。

右一卷者、本願寺開山範宴<sup>親鸞上人</sup>之累祖日野右中弁有信朝臣孫苗也、脈々相承頗明白者歟、故或顯俗姓之源、或注伝法之趣、然以当家系図為其端事、且者露月輪禪閣由緒之旨、又者為詳後慈照院猶子号、不顧后勘之嘲、手自書之而已、  
天文第五曆南呂下澣 大麓休兎（花押）

この「大麓休兎」という珍らしい雅号は、前々年「拝賀等依窮困難叶」との理由で関白及内大臣の職を辞任した九条植通が自分の現状をユーモアを交えて表現したもので、これによってこの系図が植通の自筆にかかることが知られる。

『天文日記』によると、この系図は天文五年九月十三日、九条家より本願寺へ届けられ、翌十四日、証如は千疋(一〇貫文)の謝礼金を送っている。この系図が作られた背景については、『本願寺史』(第一巻、四三八頁)に詳しく紹介されているが、天文九年十月には宮廷より要請があつて、天皇の御覧にも供せられるなど、当時としては権威のある系図であつた。

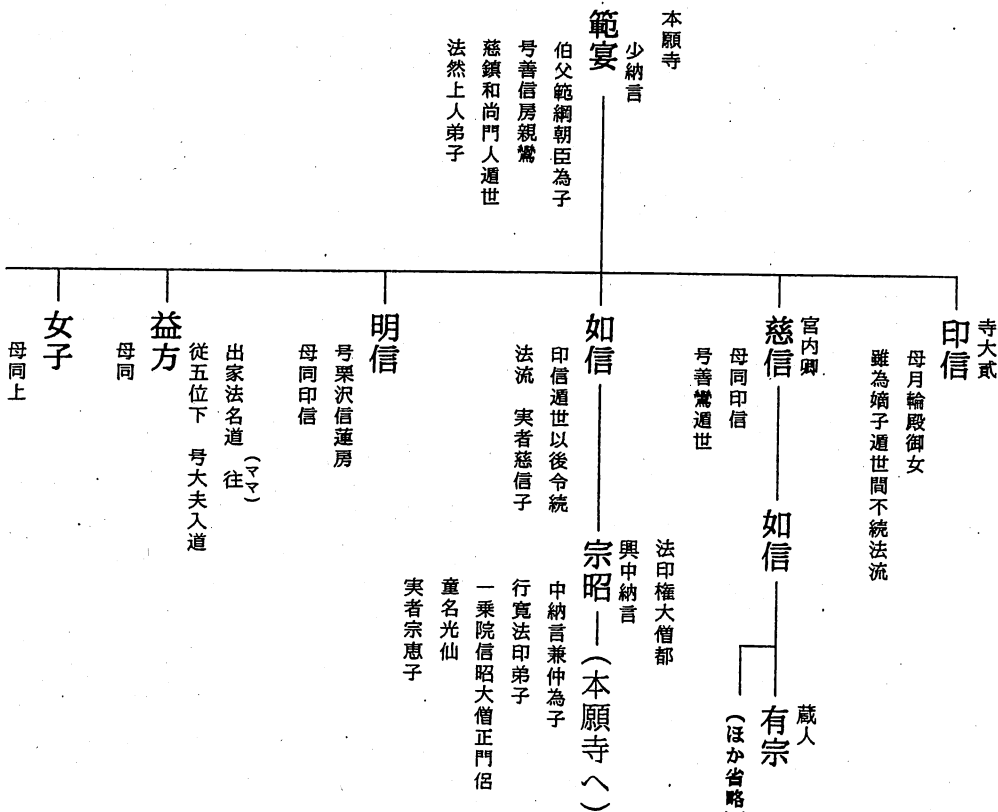
ところで親鸞の祖先の記載を見ると右にも述べたように、親鸞の父有範を日野有信の子として位置づけ、宗光と経尹とを世代からはずして、次のようになっていいる。

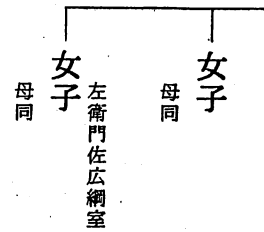


この構成は『尊卑分脈』の本願寺系図と同じである。右に引用した九条植通の奥書に「当家の系図を以てその端となす」と記していることを思い合わせると、九条家相伝の系図がこのようになっていたのであろう。

次にこの系図で注目されるのは親鸞の子についての記載で、図表1のようになっていいる。

【図表1】





このように親鸞の子を、善鸞の子如信をも加えて八人とするこ  
と、しかもその配列を印信以下男五人を先に、女三人を後という  
順序にしていること、更には如信の次に宗昭(覚如)を置いてこ  
こから本願寺の家系を始めるという構成をとっていること、この  
三点は『尊卑分脈』と全く同一である。従って『尊卑分脈』本願  
寺系図の淵源はここにあったと断じてよいのではあるまいか(注  
記については別に述べる)。とくに「親鸞—如信—宗昭」の  
いわゆる「三代伝持」を家系化しているのは、先に引用した植通  
奥書にいう「伝法の趣を注す」そのものであって、ここに植通の  
意図が強く見られよう。

もう一つこの系図の特色は、親鸞の実子の七人について、母を  
「月輪殿御女」としているところにある。「月輪殿」とはいうま  
でもなく関白九条兼実であって、この系図の作者九条植通の家祖  
に当たる。その兼実の娘(「玉日」)と親鸞とは法然の指示によ  
って結婚し、在家仏教の手本となった、という伝承があり、『親  
鸞聖人御因縁』(『真宗史料集成』第七巻所収)などに記されて  
いて、早くから真宗門徒の間に広く流布してきた。いわゆる玉日

伝説である。

植通はこの伝説を事実と信じ、「ここに九条家と本願寺との深  
い因縁のはじまりがあった」と喜び勇んで、それを系図上に書き  
表わしたと見られる。しかし親鸞と兼実の娘とが結婚したか否か  
もさることながら、七人の子全員を玉日の子とするのは、親鸞の  
家族についての植通の無智からくる誤りである。

この当時はまだ恵信尼文書が西本願寺に伝えられていることは  
知られていなかっただろうけれども、覚如が『口伝鈔』の中で恵  
信尼を取りあげ、「男女六人ノ君達ノ御母儀」と註記しているこ  
ともあって、教団の中では親鸞の妻としての恵信尼の存在は周知  
の事実だったと思われるから、恵信尼を全く記さないこの系図の  
誤りはすぐに気がつかれたにちがいない。

ところがどういいう経緯があったのか明確定でないが、天文九  
年十月、この系図が天覧に供せられることになって、教団として  
は取り扱いに苦しんだのではなからうか。このころ本願寺内部で  
系図についての動きが急に慌ただしくなっている。北西氏が指摘  
しておられることだが(大谷大学編『大谷嫡流実記』解説)、天  
文九年三月、広橋家が本願寺へ系図の借用を申し入れ、そのあと  
今度は本願寺が広橋家から系図を借用したりしている。九条植通  
の系図はどうやらそのまま天覧に供されたようだが、本願寺内部  
では別途に系図作成が進められたらしい。そんな中で出来たのが  
次にとり上げる系図だと思われる。

三 証如本系図の問題点

西本願寺宝庫に伝わるこの系図は、縦五二・五cmの白楮紙二十一枚を横に貼りつないで料紙としている。その一紙幅は二三・五cm前後のものが大部分だが、中には四分の一ほどの短いものもあり、総長は四一七・〇cmである。表紙もつけられておらず、未装で、次に述べるように親鸞の付近には小符紙二枚を貼って書き加えたり、末尾近くになると抹消訂正箇所が何箇所もあるなど、草稿本の様相を呈している。

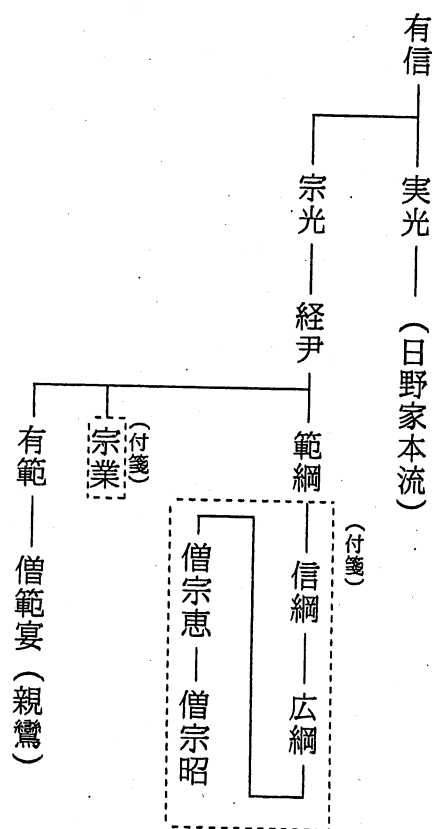
植通本とちがって、制作年代や制作者を示す奥書などが全くない。いまこれが収納されている箱に「証如上人御筆本願寺系図」との外題が墨書されているので、仮に「証如本」と命名しておくが、証如の自筆か否かは更に詳しく検証する必要がある。『天文日記』などに見られる筆致とは相当異なるからである。

逆に、いま門真市願得寺に蔵せられる実悟自筆の『日野一流系図』と比較対照してみると、その筆跡が酷似している。一部の字形に相違するものもあるから、執筆時点に若干の年月差はあろうが、筆致は全く同一だから、同筆とするべきではないか、と思われる。今後何らかの機会に実物による両者の対照を期待することとして、今はそれを視野に入れつつ、この系図の特徴を検討することにする。

この系図の筆頭は真夏（日野家の祖）で、九条植通本のような

大織冠鎌足から始まる藤原氏の系譜は記していない。「真夏—浜雄—家宗—（六代略）—有信」と続く世代は植通本と同じで、註記が少し増加した程度の違いがあるだけだが、その註記の中で家宗に「日野法界寺草創也」との註記が加えられているのは少し注目される。

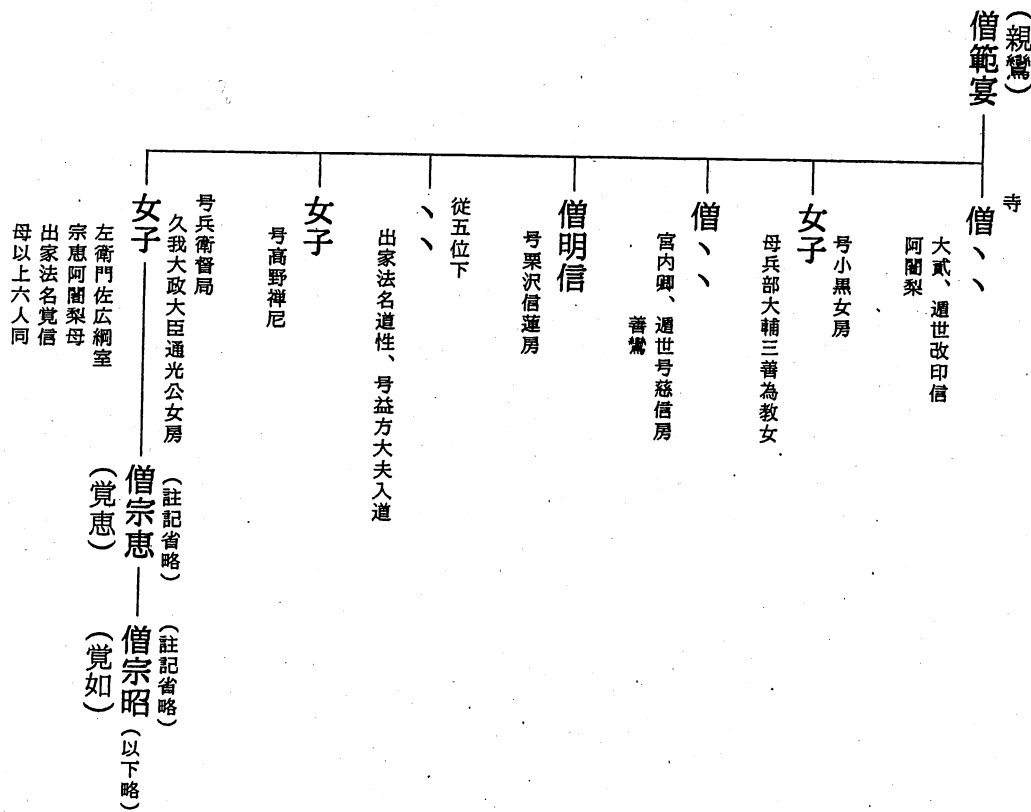
有信の子からは植通本と大きく異なってくる。先に述べたように植通本は実光、有範、範綱の三人を有信の子と位置づけたところから大きな錯誤が始まったのだが、この本は、



として、宗光および問題の人経尹を世代に入れていて、修正されている。ただ右の点線で囲んだ部分は、大小二葉の付箋紙を貼ってあとから書き加えたものである。もっとも筆跡は同筆なので、当初に制作後、それほど時日を隔てずに書き加えられたものと思われる。

この系図で最も注目されるのは親鸞の子女についての記載で、  
図表2のようになっていている(写真後掲)。

【図表2】



ここでまず眼につくのが、親鸞第一子、第三子、第五子の名前が「、、」と墨点だけとなっていることだろう。このような記載は、この系図の中では他に見られない。中世には尊敬する人の実名を書くときは一字欠字とする風習があったが、二字とも欠字にすることはないし、ここはそんな敬意をもってはばからねばならぬような人物ではない。また逆にここへ記すのが都合が悪いので隠すために伏字にしたとも思えない。となるとこれは名前が判明しないのでとりあえず伏せておいたものと考えざるを得ない。

その親鸞第一子は、植通本では「印信」となっているのだが、この証如本の作者は、「僧、、」に「遁世改印信」と註記しているところを見ると、「印信」は遁世してから後の名であって、僧として得度した際の実名ではない、と判断したようである。つまりこの系図の作者は系図には実名を記載すべきだとの原則を堅持しているらしい。親鸞を「範宴」、蓮如を「僧兼寿」と表記しているのもそのためだろうから、この系図はそういう立て前から実名のわからなかった第一子の名を伏せておいた、と考えられる。これは系図作者としての正しい姿勢による表記と評価できよう。

ところでこの第一子は実悟撰の『日野一流系図』では「範意、遁世改印信」と記され、その後のほとんどの本願寺系図がそれを踏襲している。つまり範意という名は実悟系図制作時に初めて判明したらしい。ということになると「範意」の名を記さず、伏字としていることは、この系図が実悟系図制作以前に制作されたことを示す一つの徴証といえよう。実悟系図は奥書によって天文十

年(一五四一年)の制作が明確だから、この系図はそれ以前の制作ということになるわけだが、実悟は『一流系図』の奥書に、

当家一門系図、雖不委、少々見合諸本、注付之、先年享祿之錯乱、既可紛失之処、予数巻依書留、于今相残畢(以下略)

と記していて、これまでも系図を作成していることがわかるので、あるいはこの証如本がその一つなのかもしれない。

次に、親鸞の第三子「僧、」を見ると、「遁世、号慈信房善鸞」との註記がある。植通本は「慈信」としているが、これは房号であつて実名ではないとの判断から伏字にしたのだろう。「慈信」が房号であることは親鸞の消息にも見えるところであつて、作者のこの措置は正しいといえる。『日野一流系図』ではこれを「善鸞」としているのは、実悟が後になってこれを実名と認定したからであろうか。

第五子の「、」は植通本では「益方」となっている。しかしこれも「出家法名道性、号益方大夫入道」と註記されているように、字名(通称名)と認定して、ここへ採用しなかったらしい。『日野一流系図』で「有房」となっているのは、実悟のその後の調査で判明したのであろう。

#### 四 系図に現れた親鸞子女の生母

右の系図で注目されるのは、これらの子女の生母についての記述である。第二子の女子の註記に「母兵部大輔三善為教女」とあり、第七子の女子、即ち覚信尼についていろいろ註記してあとへ「母以上六人同」としている。これが先にも述べたように『口伝鈔』の中で、恵信尼に「男女六人の君達ノ御母儀」と註記されているのと相応するものであり、これは事実として一般に認められている。

近年、親鸞が慈信房善鸞に宛てた義絶状の中に、「マ、ハ、ノ(尼)アマニイキマドワサレタルトカ、レタルコト、アサマシキソラゴトナリ」と記されていることをとり上げ、恵信尼は善鸞にとつて継母だった、と主張する向きがある(『中外日報』二〇〇〇年四月八日号掲載、吉良・稻吉・稲田・加藤四氏連名「親鸞の妻・玉日実在説」)。実は私の今回の原稿もこの『中外日報』の記事に刺激されて書くハメになったもののだが、この御説の致命的な欠陥は、義絶状の解釈を誤ったところにある。

この義絶状を静かに読むならば、善鸞が恵信尼を継母と呼んだというようなことは、どこからも出てこない筈である。この文面から知られることは、善鸞にとつて継母と呼ぶ人物が存在したかということ、即ち親鸞の側から言えば、その生涯のうち二人以上の女性を妻と呼ばれるような関係をもったということ、それだけのことであつて、その人物を誰と特定することは不可能な筈である。それなのに「恵信尼は善鸞にとつて継母であった」と断定し、善鸞の生母を九条兼実の娘と記した江戸時代の系図を探し出して、

それに高い評価を与えようとするのは完全に誤っている。善鸞の生母などについての証如本や実悟本の価値は否定されるべきではない。

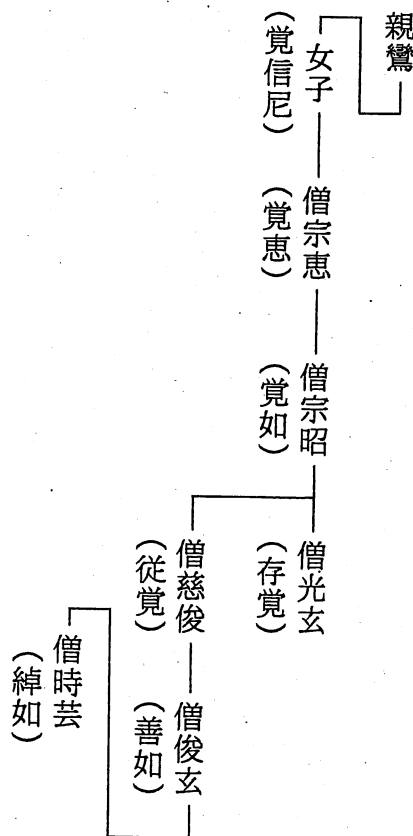
問題は第一子「僧、」の母である。証如本では他の六人については母を明記しているのに、この第一子だけには記入がない。制作当時伝承がなかったのか、あるいは信頼できる史料がなかったのか、無記入のままとしたのかであろう。

ところが実悟の『日野一流系図』になると、ここに「母後法性寺摂政兼実公女」との註記が加えられ、この後の多くの諸系図にもこれがとり入れられることになる。最初にこれを取り入れた実悟の責任は重大なのだが、実悟は何を根拠にこれを取り入れたのだろうか。九条植通をも動かした、あの『親鸞聖人御因縁』以来の根強い玉日伝説の力に圧倒されて妥協したのかもしれない。しかしいまはそれを追究する術がない。

兼実の娘玉日と親鸞との結婚説話については、民俗学的見地に立っていざれ稿を新たに論じてみたいが、父九条兼実の動静については日記『玉葉』があつて、その家庭状況までつぶさにわかっている。それを詳しく分析された多賀宗隼氏の『玉葉索引』（一九七四年、吉川弘文館刊）によると、兼実には娘が二人あったという。しかしその一人は後鳥羽天皇の中宮となった宜秋門院任子であり、他の一人は四歳で夭死してしまっている。こうしてみると、兼実に玉日のような娘が存在した可能性はゼロに近いといえる。

### 五 血統か法統か家系か

この証如本でもう一つ重要なことは、本願寺家系の出発点が、親鸞の第七子女子（覚信尼）となつてゐることであろう。植通本では先に述べたように、善鸞の子如信を親鸞の子と位置づけ（猶子としたつもりかもしれない）、そこから本願寺の家系を出発させている。「三代伝持」説を生かした、言うなれば法統重視の系図になつてゐる。それに対してこの証如本は、

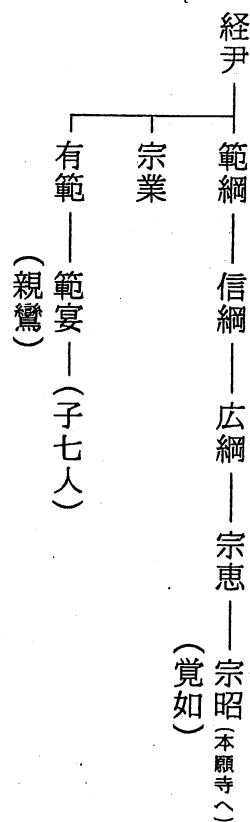


と次第相承させている。これは親鸞からの血統が本願寺歴代へ続いているという点を前面に押し出した系図だと言えよう。たしかに親鸞から娘へ、そしてその子から孫・曾孫と血筋で継承されてきたのが本願寺である。それはまちがいない。

しかし一般に家の系図は、父から子への父系制で制作される。



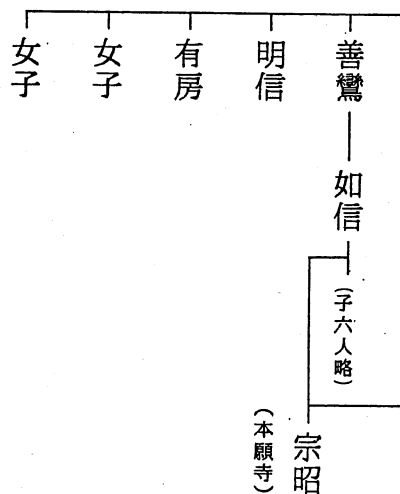
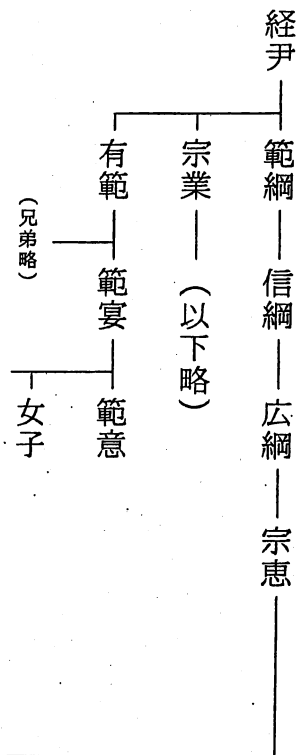
その点からいえば、親鸞の娘からの継承を図示するのは系図作成の原則にはずれている。従って本願寺の家譜としては、



となるのが正統であろう。そのように作られた系図も戦国期には既に作られていた、と思われる。龍谷大学図書館蔵の「大坂本願寺系図」(『真宗史料集成』第七巻所収)はその系統に属するものである。

実悟は血統か法統か家系かの狭間にあつてどうするか腐心したらしく、『日野一流系図』のその部分は要点を略記すると、図表3のようになっている(要点のみ表示)。

【図表3】

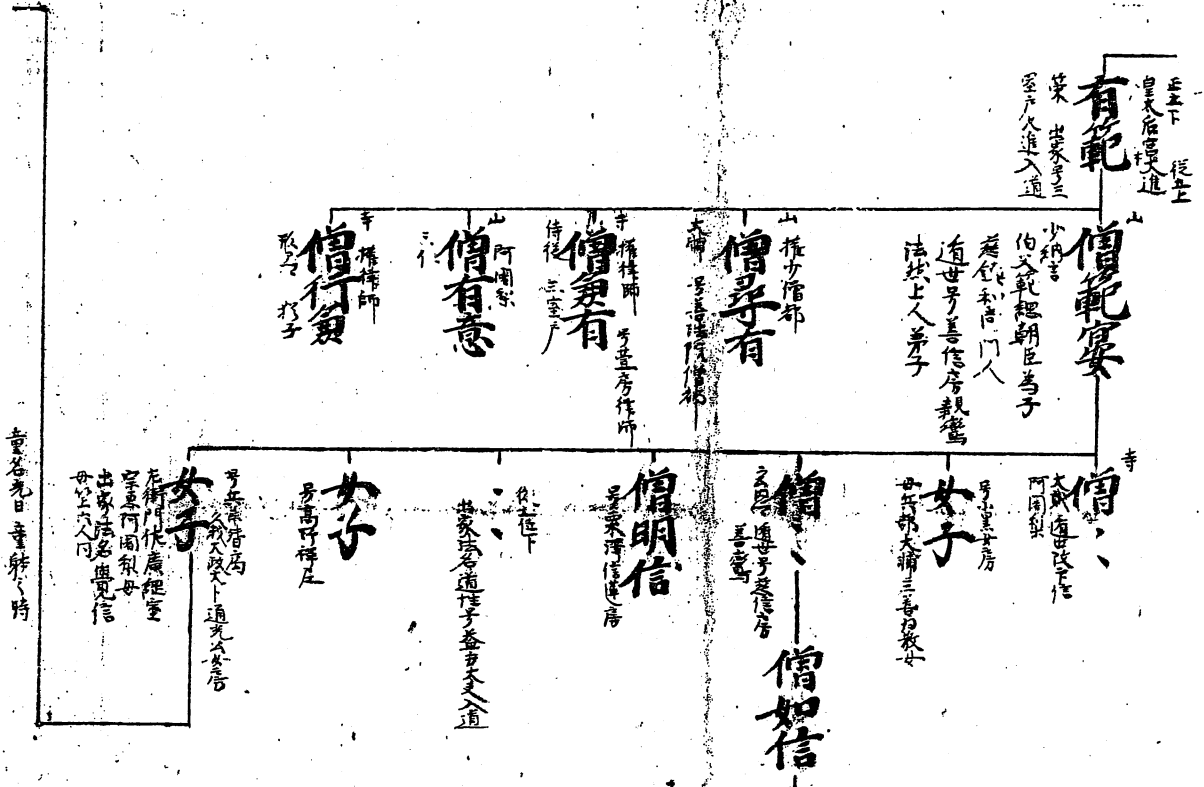


つまり宗昭(覚如)は、日野家の家系を継ぎながら、親鸞の孫如信から法統をも継承したとして、植通本と日野家家譜とを折衷併合させる、という無理な系図に作っているのである。実悟苦肉の策だったのではあるまいか。

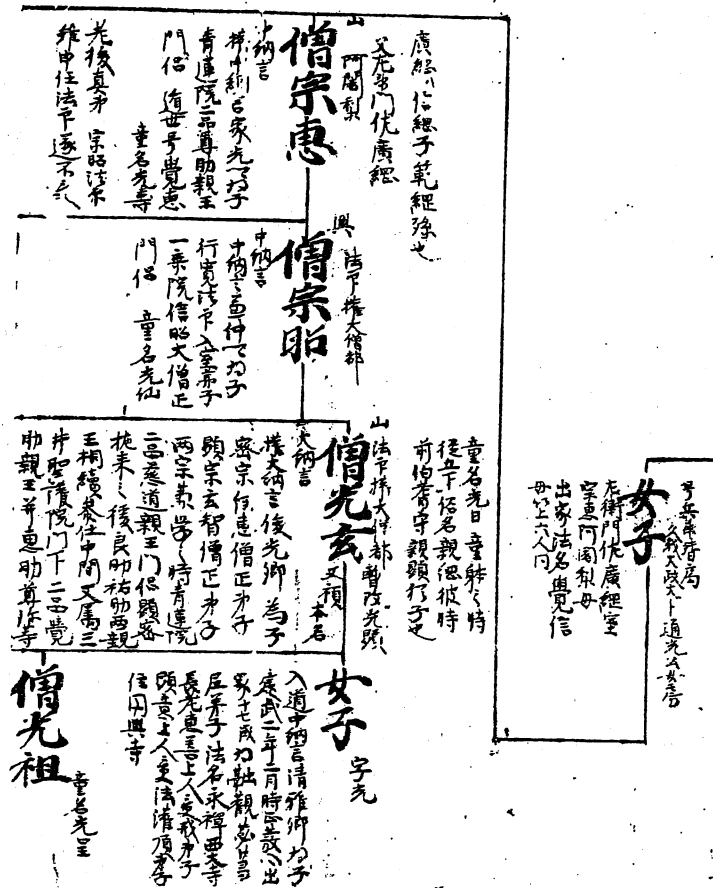
しかしこの形態は長くは継承されなかつたと思われる。江戸時代に入って制作される本願寺系図はその多くが「親鸞—覚信尼—覚恵—覚如—」の血統重視の系図となっている。『統群書類従』系図部に収める本は、流布本の代表といえようが、その形を踏んだ系図である。これはなにも証如本が重視されたからでもあるまい。教団も門徒も、本願寺が親鸞の血筋を引いていることを最大の誇りとし、従つてそのように表記した系図を好んだからにちがいない。系図の原則がどうあるうと。

(ひらまつ・れいそう 本願寺史料研究所研究員)

古本本願寺系図 (図表2写真)



古本本願寺系図 (図表2写真)



《編集後記》

本号は平松令三先生より玉稿を頂戴することができ、無事発行にこぎ着けました。

毎年のことですが、子供たちに「宿題は出来てるか」と注意するの  
 が日課のような夏休みも慌ただしく終わり、ようやく秋らしくなっ  
 きました。子供たちに注意する編集者自身の宿題は、半分も出来な  
 った状態ですが、かなりのプレッシャーになっていたある自治体史  
 の原稿を書き上げられたことだけが救いです。(さ)